

山と俳句(四)

やぶ山の思い出

井本 光蓮

西日本の最高峰は石鎚山(1982m)で、四国には2000mを超える山は一つもないが、1500m以上の山なら百座を越えている。

中でも愛媛県の赤石山系は人気の山で、高度は1700mしかないのに、本州の3000m級に匹敵する高山植物が見られる岩山で、西赤石もの～物住ずみのあたま頭～前赤石～八巻山～東赤石へのルートは四国第一級の縦走路として知られている。

しかし、この縦走路そを逸れて物住頭から北西きつりつに屹立する岩峰、上兜山(1561m)へは誰も入ってゆかない。理由は、ルートがやぶかぶとでふさがれているからだ。上兜は今も忘れられた山であろう。昔この山へ一度だけ登ったことがある。

あれは昭和63年の10月10日、あの頃はいつも家内と二人連れの山旅だった。

早朝3時過ぎに二人で須崎市の自宅を出発。この頃の赤石への最短ルートは大川村から予土県境を越える太田尾越だった。それ以前は、遠く徳島県の阿波池田を迂回して愛媛県に入り、川之江市・伊予三島市を経て、法皇山の細く長いトンネルを抜けて遥かに銅山川さかのぼを溯らねばならず、赤石は遠い遠い山だった。高知県大川村から愛媛県別子山村へ、太田尾越が抜けた当時は物凄い悪路で、しかも絶壁を縫う切通しの怖い狭い路だったが、それでも赤石が近くなったことを喜んだ。

5時50分日浦登山口に到着。6時出発、銅山越を経て写真を撮りつつ9時30分西赤石山頂（1626m）着。岩場にプロッケンが出っ放して登山者が歓声を上げていたが、やがてガスが切れ始めて、遙か南に石鎚の連山が雲海に浮かんだ。

西赤石を越えて、10時50分物住頭（1634m）に着く。ここから北西に望む上兜が今日の目的だが、ほとんど道の痕跡がない。家内をここに待たせて独りピストンすることにして、11時出発。

初めかすかに見えた道も最初の岩場を過ぎると消え、本格的なやぶこぎとなる。何回か迷い、帰路の安全を確保するために、要所々々の木の枝に道しるべの赤テープを巻きつつ進む。一度足を取られて仰向けに倒れたら、頭から下になって笹を滑りだしたので慌てた。笹をつかんで滑りは止めたが、容易に起き上がれなかった。進めば進むほどやぶは深く、完全にルートを踏みはずしている。

悪戦苦闘していると思いきや遥か下の方から人の呼ぶ声がした。まさかこんな所で？ こちらも呼んでみたが返事がない。幻聴か？



岩峰・岩兜山

それとも、けもの声だったか？

だがやがて深いやぶの中から、ざわざわと4人のパーティが現われたではないか。僕も驚いたが、先方は仰天していた。男性2人・女性2人で、皆若い学生らしかったが、一目見て女性の1人が疲労困憊こんぱいしているのが分かる。リーダーが「こんな所でもし人間に出会えたら、誰であろうと抱きつ

いて挨拶しようと話しながら来ました。」と。やっと人に出会えたことで安堵の色が顔に溢れていた。福山から来たことや、上兜へ登るつもりが道に迷い、終日のやぶこぎで遂にダウン、昨夜はやぶの中でビバークしたことなどを話す。それじゃ遭難寸前じゃないかと呆れたが、「ここまで来ればもう大丈夫、このすぐ上が物住頭で、ハイウエイのような縦走路に飛び出す。あと30分とはかかりませんよ。」と励ますと、嬉しそうに白い歯がこぼれた。下山は、東赤石か西赤石かどちらに向かえばよいだろうかと聞かれたので、西赤石を越えて銅山越から銅山峰ヒュッテに下りるルートすすめる。これが最も安全で近い。ヒュッテには、赤石を知り尽くした主人の伊藤玉男さんがいて、どんなアドバイスでもしてくれるだろう。「ここから物住まで北側は絶壁だが、僕の付けて来た赤テープは当てにせず尾根通しに登るがよい。」と話し、女性には優しく「もうすぐだからね。」と励まして別れる。4人の姿はすぐやぶに隠れたが、やぶを漕ぐ音がしばらくは消えなかった。

上兜への登りにかかる稜線から東を望むと、物住頭から東へ続く赤石連山が指呼の間にある。

ピークを一つ越えた上兜主峰直下で又道が消え、南へ巻いている道を辿ったが、これはどうも主峰を巻いて下る道らしい。やむなくこの道から直角に山勘で山頂を目指して急登する。

しばらく木の根をつかみながら登ると、12時20分うまく山頂に出た。思った程展望はよくないが小さいケルンが積んであり、古い板切れに山名と「アカイシヒョウタンボク山岳会」の名が記してある。こんなやぶ山にも、結構登る物好きがいるものと見える。物住から目と鼻の先の岩のこぶに過ぎないのに、ここまで1時間20分もかかっている。油断せずに下りよう。よく探すと下山の道が絶壁の尾根伝いにあった。途中、南に遠く石鎚まで見えているようだが、よそ見をしているとすぐ道に迷う。道は現れては消え、消えては又現れた。この下山中登山

靴が二度もやぶに取られて足から抜けてしまった。この経験からその後、やぶでほどけぬ紐の結び方を覚えた。

13時40分ようやく物住に帰着。時間がおかしいので、待ちかねていた家内の時計と較べると、僕の方が40分も遅れていた。やぶこぎの最中、時計の竜頭が^{りゅうず}あちこちに当たって針を狂わせたらしく、こんな経験も初めてだった。(本稿では修正した時間を記す。)それに、上衣の両ポケットが小枝や笹の枯葉で一杯になっている。何故こんなものが何時入るのか考えても分からなかった。

ザックから缶ビールを出して飲みながら、気になる4人組のことを家内に聞くと、女性の一人が泣いていたので、もうここから先やぶこぎはありませんよと慰めながらしばらく話した由。彼らはその内、ようやく元気を取り戻して出発したという。14時僕らも出発、14時50分西赤石着。やぶこぎのせいかビールの酔いか、疲労で足が上がらず、山頂にはもう誰もおらぬ。(中略)17時40分日浦下山。この日の行動時間11時間40分。帰宅は20時35分、走行距離246kmだった。

この山行には後日譚^{たん}がある。

翌朝、視力の異変に気がつき、2日後医大病院へ出かけたなら、T教授は僕の眼底を一目見るなり、「即入院です！ 両目とも、網膜がぼろぼろに剥離^{はくり}している。車の運転などもっての外。すぐに3階の病棟



岩兜山稜線より赤岩山山系を望む(右端の丘陵が物住頭)

まで必ずエレベーターで、エレベーターまでは用心してそろそろ歩くように。」と言われたので、家へ電話しようと公衆電話の方へ歩きかけたら、「そんなに急いでは駄目だ！ これ以上眼球に振動をかけると危ない！」と怒鳴られた。僕は2日前の上兜山を思い出して開いた口がふさがらなかったが、怖る怖る「失明するでしょうか？」と聞くと、「今ならまだ間に合うでしょう。これ以上は待てません。」そして教授は、今夜からすぐに治療にかかるよう若い医師に指示された。この晩から僕は、文字通りベッドへ^{はりつけ}磔にされて、四六時中洗顔・ひげそりは勿論、三度の飯も、両便さえベッドに起き上がることを厳禁され、その上両目をふさがれて拷問のような70日を過ごすことになる。この後、僕にできることと言えば、昼夜ぶっ通しで、死物狂いの数息観しかなかったのだが、その中身たるや、とても人様にお話しできる代物ではなかったことを、今も深く愧じている。

入院中のへボ句を少しお目にかけて、この稿を終る。

失明を怖れて更けしちろかな
 眼帯を透す冬日や麻醉醒む
 目玉切られ闇に糞する寒さかな
 片目開いて両手が見える日向ぼこ

(つづく)

著者プロフィール



井本光蓮（本名 / 淳作）
こうれん

昭和3年、高知県生まれ。上原商店社長。昭和39年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅特任布教師。庵号 / 竜穩庵。